

立命館大学国際平和ミュージアム 第47回ミニ企画展示

友禅図案（絵摺り）に描かれた 「韓国併合」



2009年5月23日～6月21日

グローバル COE プログラム
「日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)

立命館大学コリア研究センター

はじめに

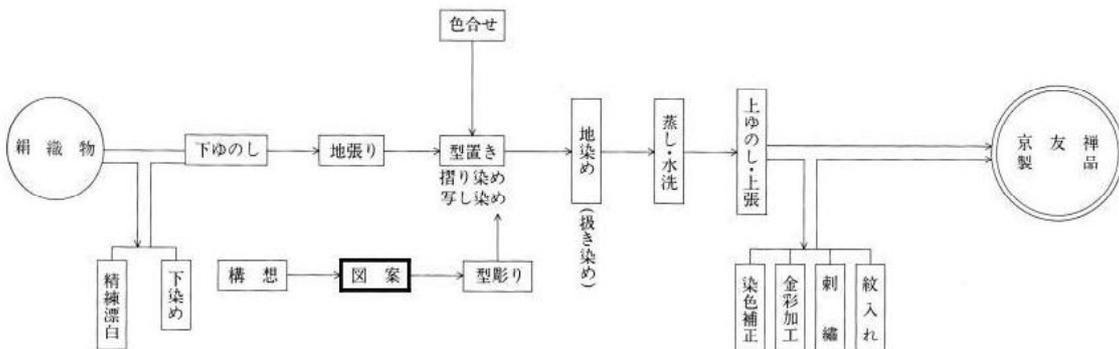
京都の伝統工芸が美術や芸術にとって重要なものであることは誰もが認めます。けれども、「戦争」との関わりをイメージすることはほとんどないでしょう。

しかし、今回紹介する友禅染の絵摺りは、京都や伝統工芸も戦争から自由ではなかった様子を教えてください。伝統工芸と戦争との関連について、改めて考えて頂きたいと思います。

1. 「図案」と「絵摺り」 - 染織の技術・工程 -

「図案」とは、友禅染や西陣織の着物柄の設計図にあたるものです。明治時代に design（デザイン）の訳語として造語された言葉だと言われています。下絵や正絵と呼ばれることもあります。すべて肉筆で、鑑賞にも十分に耐える絵画です。友禅も西陣も多くの複雑な工程をへて完成しますが、その図柄を決める仕事です。この図案に基づいて様々に分業された仕事が進められてゆきます。

ところで、友禅染を大きく分けると、手描き友禅と型友禅があります。そのうち、型友禅では一つの図案に対して何枚もの型を彫り込みます（型彫り）。その型で布に複雑な文様を摺り写すのですが、型彫り後、紙に試し摺りしたものを「絵摺り」と呼びます。この絵摺りによって仕上がりを確認するわけです。



型友禅の製作工程（『京の友禅史』より。友禅染には型友禅の他にもさまざまな技法がある）

なお、江戸時代にも下絵はありましたが、これは技術的にも現在の図案とは異なり、おらかなものだったようです。生産する量や柄の繊細さが全く異なっていたためです。繊細な図案が使用されるようになるのは、明治時代に欧米の技術を積極的に利用するようになってからのことでした。その意味で、図案は伝統産業の近代化を象徴するものでもあります。

明治時代の前半には画家が図案を描いていましたが、染師や職人たちがそれを着物の約束に従って加筆・訂正する必要があったようです。しかし、量産化や高度化・多様化した染織に対応するため、図案に対しても専門的な要求が高まってくるようになります。明治時代の半ばには専門の図案家も出現し、明治末年には図案家の研究組織も生まれるほど発展を遂げました。

「図案」や「絵摺り」は製品ではないため、一般の人々の目に触れることはなく、あまり知られていません。しかも、染織関係の図書の中でも取り扱われることが少なく、評価が高

いとは言えません。しかし、「デザイン」として欠くことのできない存在ですし、一般の方々にとっても、一目見れば手仕事の技と美しさに目を奪われることでしょう。近年では陶芸・漆芸をはじめとする様々な工芸で図案が見直されています。

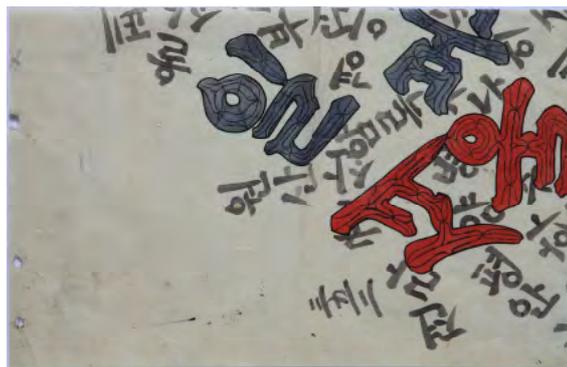
2 . 1910 年前後の友禅染の絵摺り - 「韓国併合」を記念したデザイン -

美術的な着物と戦争とは何の関係もないように思えますが、実は様々な戦争柄の着物が沢山つくられていました。戦争を銃後から応援していたのです。

図案は専門の絵師や画家たちによって描かれ、それをもとにして専門の型彫り職人が型を彫りました。絵摺りはその型から作られた試し摺りです。「美術品」といいたくるものを含みますが、試し擦りや見本として使用されたため、様々な書き込みがされたものもあります。図案や絵摺りを観察すると、流行の移り変わりを読み取ることができます。以下に紹介する絵摺りは、2009年1月に古書店より購入した資料です。明治末頃から大正年間にわたる64枚の絵摺りの中に、6枚だけ、「韓国併合」に関連した絵摺りが確認されました。なお、これらの絵摺りは着尺のものより小さいため、袱紗や羽裏（羽織の裏地）のためのものだと思われま

(1) ハングル地名柄

大きなハングル文字で「ソウル」(赤字)と「日本」(青字)、その下敷きになるように淡い灰色の小さなハングル文字で韓国の地名(都市名)が様々な角度で書き込まれています。ソウルのハングル表記は現在と異なりますが、これは戦前の古い表記法を用いているためです。ハングル表記は正確で誤字などは確認できません(現代の表記とは違うため、現在の韓国人に見せると誤字だと指摘しますが、当時の表記法としては正確です)。また、大文字の中には、いわゆる「アイヌ文様」が描かれています。



(1) ハングル地名

ハングルの地名と混じって紛らわしいですが、「三五二」もしくは「二五二」と縦書き漢数字が書かれています。こうした数字は他の絵摺りにも確認されるもので、デザインの整理番号だと思われます。これ以外の絵摺りには裏面に書き込みがありますが、この絵摺りには確認できません。

(木立雅朗)

絵柄に書かれているハングルについて

出てきた地名を分類すると以下ようになります。

国名：日本

都市名：ソウル、釜山(プサン)、蔚山(ウルサン)、元山(ウォンサン)、群山(グンサン)

地方行政区(道)：全羅(チョルラ)[全羅道]、平安(ピョンアン)[平安道]

（２）朝鮮・日本銘

絞り模様で描いた灰色の「朝鮮」という文字を覆うように、青色の「日本」という文字が上書きされています（文字はいずれも右から左）。なお、1897年に朝鮮は国号を大韓帝国に改めましたが、韓国併合後に強制的に朝鮮に改めさせられました。「日本」の文字や枠内には「アイヌ文様」が描かれています。左上には桜花が一つ描かれています。左下に



（２）朝鮮・日本銘

「一〇七三 吉井氏行 / 九枚」と書き込まれ、さらにその下に朱印「芦嶋」が押捺されています。別の絵摺りに「彫刻 芦嶋」とあるため、「芦嶋」さんは型彫りの業者だと思われます。なお、「」は他の絵摺りでも確認されますが、「メ」を示す記号だと思われます。この絵摺りのために使用された型の枚数が「しめて九枚」だったことを示しています。

裏面に「8月25日」などの書き込みがあります。

（３）韓半島地図

朝鮮半島の地図と地名（京城、仁川、義州、元山、釜山）が書き込まれています。なお、「京城」は「漢城」を日本が強制的に変更したものです。日本列島と朝鮮半島が同じ色調で描かれています。海の部分に文字や数字などが書き込まれていますが、「1910・



（３）韓半島地図

（日韓？）併合」、豊臣家の家紋と「征伐」の文字、「（神）功皇后 征伐」の文字が確認できます。「韓国併合」を歴史的なものとして肯定的に理解しようとする意図が読みとれます。

なお、このデザインは本州のデザインと組み合っ一つになった可能性も想定されます。しかし、本州側の絵摺りは確認できませんでした。整理番号などから考えて、これだけで完結していた可能性もあります。

左上に桜の花が一つ描かれています。右上に「一〇七四 拾四枚 / 水の氏行」と書き込まれ、その下に朱印「芦嶋」が確認されます。（１）は染工場などの注記がありませんが、（２）～（６）まではすべて吉井工場に出されています。なぜ、このデザインだけが水野氏の工場に出されたのかはわかりません。デザインによって得手不得手があった可能性があります。このデザインだけ、青く塗りつぶした面積が大きいことに原因があるのかも知れませ

ん。

裏面に「8月28日」などの書き込みがあります。

(4) 大日本帝国・朝鮮銘

一部の文字が切れていますが、古いハングル表記で「大日本帝国 / 朝鮮」(右から左へ)と書かれているようです。このハングル表記は正確です。文字を区切る帯文様は、(1)・(2)と同じく、アイヌ文様の中でもっともポピュラーな「括弧文」と呼ばれている文様です。「韓国併合」を記念したデザインに、どうしてアイヌ文様がとり入れられたのでしょうか。それについては後述します。右端に「一〇七五 七枚 吉井氏行」という書き込みがあり、その下に朱印「芦嶋」が確認できます。



(4) 大日本帝国・朝鮮銘

(5) 1910年銘

全体は地球儀のようになっていますが、中央部分は空白で模様がありません。左上には、花の上に日本列島と朝鮮半島の地図が描かれています。樺太の南半分と朝鮮半島が日本列島と同じ色で描かれているのは、大日本帝国の領土を示しているのでしょうか。日本列島の下には五線譜が描かれています。「韓国併合」は明治43年、すなわち西暦1910年でした。「3分の4拍子」は、明治43年を、音符になぞらえた「1910」は韓国併合の年である西暦1910年を示しているのでしょうか。右下には桜の花がひとつ描かれています。



(5) 1910年銘

下には「三四三 吉井ノ十枚」と書き込まれています。「三四三」は絵摺りの整理番号だと思われます。「吉井」は「工場 吉井」や「吉井氏行」と記入された絵摺りがあることから、吉井氏の工場行きを示すメモだと思われます。染めの作業をした工場でしょう。「十枚」はこの絵摺りのために製作・使用した型の枚数だと思われます。

裏面には「8月27日」かと思われる走り書きの書き込みがあります。

(6) 檻の中の鶏柄

檻に入れられた鶏を描いた絵摺りもありました。整理番号が「三四四」ですから(1)の「1910」絵摺りの直後に綴られたものと分かります。酉年は明治42(1909)年ですから、整理番号と綴りの関係が正しければ、一年前の干支を描いたこととなります。その上、檻は

めでたい干支を描いたにしては不自然です。「鶏林」は朝鮮の異称、「秋津島・蜻蛉州」（あきづしま）は日本の異称ですから、「トンボ（蜻蛉）= 日本が、鶏 = 朝鮮を捕らえた」ということを意味している可能性があります。

裏面に「8月25日」などの書き込みがあります。

（7）その他の絵摺り

この他に、さまざまな絵摺りがありますが、「四十四年秋勅題」（明治44年 = 1911年）の絵摺りや、亥年を表したイノシシの絵摺りがありました。ちょうど明治44

（1911）年が亥年にあたります。明治43（1910）年は戌年ですが、戌の絵摺りは確認できませんでした。

（7）台紙

これらの絵摺りを販売していた古書店では仕入れた絵摺りの冊子を外して一枚ずつ販売していました。そのため、すでに売却されていたものもあります。番号が抜けている部分は売れて抜けた可能性があります。購入した64枚の絵摺りは右の写真の冊子表紙にはさまれていましたが、同じような冊子が何冊もあったため、もともとこの冊子に綴じられていたという保証はありません。綴じ穴の観察から、この台紙にはさまれていた絵摺りのほとんどは別の台紙に綴じられていたことが分かりました。ただし、他のいくつかの冊子もこれと同じ台紙を使用しており、「大西商店」と記載されたものが複数確認できました。いずれも、これと同じく大正期の年号が書き込まれています。なお、「摺合綴」とは絵摺りを綴ったことを示している可能性があります。

絵摺りの中には大正4年や大正14年などの年代を記入したものがいくつか確認されて



（6）檻の中の鶏



「四十四年勅題」図案



亥の図案



絵摺りを挟んでいた台紙 大正三年秋之部（1914年）

おり、おおむね、明治末から大正時代の絵摺りであることがわかります。その意味でも「大正三年」の台紙は矛盾します。 (木立雅朗)

3. 「韓国併合」について

日本が韓国(大韓帝国をさす。1897年から朝鮮は国号を大韓帝国としていた)を植民地として併合したのは、1910年8月22日のことでした。この日に「韓国併合に関する条約」を通じて、韓国皇帝が韓国の主権と領土、国民を完全に日本国天皇に譲渡するということを宣言したのです。しかし、日本の韓国植民地化は、すでに1904年から戦争とともに始まっていました。1904年に日露戦争が勃発するや、韓国政府は中立宣言をしますが、日本はこれを無視して軍隊を韓国に派遣し、ソウルに日本軍が駐屯している状態で韓国の外交権を奪う「日韓議定書」を締結させます。以後3つの条約の締結を通して、韓国の「保護国化」、司法権・高官任命権の剥奪など、段階的に植民地化を進め、最終的に1910年の「韓国併合」に至ります。

そもそも鎖国政策をとっていた朝鮮の開国(1876年)も、軍艦で開国を要求した日本の武力によるものでした。この時に締結させられた不平等条約により朝鮮の釜山、元山、仁川などの港を開港して日本人租界を設置し、以後は不平等条約に基づく交易を拡大して開港地、日本人租界をどんどん増やして行きます。上記の3つの都市の他に京城、群山なども、併合の頃にはすでに日本人が多く住む都市となっていました。 (庵途由香)

4. 袱紗と羽裏

紹介した絵摺りはいずれも着尺のものとはサイズが違うため、羽裏や袱紗など、着尺以外のものだと思われます。正方形のものうち、僅か一枚ですが「袱紗」と書かれているものがあることから、1・6のような正方形の図案は、袱紗の絵摺りだった可能性があります。それより小さな長方形のもの(2~5)にも、やはり僅か一枚ですが「羽裏」と書かれたものがありますから、ほとんどは羽裏だったと思われます。

袱紗

袱紗は、慶弔行事において、広蓋(黒塗りの盆)に置いた贈り物の上にかけるために使われます。広蓋より大きな正方形の絹布です。風呂敷とは違って二重になっています。最近では家紋を入れた袱紗が多くなっているようですが、袱紗の柄を見れば相手の気持ちが分かるということから、冠婚葬祭別の贈る目的にふさわしい意匠模様を工夫し、動植物(松竹梅・鶴・鴛鴦)、能(高砂や狸々)伝説・説話(鳳凰や宝船)・自然現象(日の出)なども描かれています。

羽裏

羽裏は羽織の裏地で、表からは見えない部分です。けれども、羽織を脱いで休む場合、しゃれ心を示す大切な部分ですから、表の図柄はそのままにして羽裏だけ取り替えることも多かったようです。季節や時折の話題の場合には、特に取り替えられる頻度も高かったでしょう。

社会変化を反映したデザイン

紹介した絵摺りのように、「韓国併合」という重要な社会変化をとり入れたのは、遊び心、おしゃれ心の現れだったと思われます。しかし、韓国人にとって、それは全く異なった意味をもったことでしょう。袱紗・羽裏のいずれにせよ、ハングルがある程度読め、絵画の意味を読み取る能力がなければ鑑賞することができません。高いレベルの絵解き能力を必要とします。そのように考えると、一般庶民のものというより、裕福で知性の高い人々をターゲットにした商品だったと考えられます。ただし、1910年を過ぎれば「旬を過ぎたデザイン」となり、あまり長期間使用され続けることはなかったのではないのでしょうか。これらのデザインの「旬」は、限られていたと思われます。

5. アイヌ文様と「韓国併合」当時の社会

1910年、日本は韓国を併合して朝鮮総督府を設置し、国号を「朝鮮」に、漢城（ソウル）を「京城」に改めました。これは征韓論以来、数十年にわたって「朝鮮」を狙い侵略し続けてきた、ひとつの帰結でした。しかし、これにとどまることなく、植民地「朝鮮」を守るために、さらに泥沼のような侵略戦争を拡大し続けることとなります。人々は様々な苦しみを強いられましたが、侵略の「旨み」を堪能し、積極的に加担していました。日露戦後、賠償金がとれないとわかると日比谷焼き討ち事件をおこすなど、見返りを求めていたことも確かです。

アイヌ文様

アイヌ文様にはさまざまな種類がありますが、紹介した絵摺りに描かれた文様は括弧文と呼ばれるものです。これはアイヌ文様の中でもよく使われた代表的な文様で、1926年に出版された『アイヌ文様』（杉山壽榮男編）にも掲載され、「括弧文の変化」という図まで付けて特別に説明しています。アイヌ語では「アイウシシリキ ay-us-siriki」と読まれ、「（神の）棘がついている文様」



『アイヌ文様』の括弧文（樋田他 2004 より）

（www.welcome.city.sapporo.jp/pirka/siriki/index.html。2009年4月12日）という意味を持っています。この括弧文様は江戸時代の終わりから明治前半期の浮世絵にも確認されます。「天竺徳兵衛」という天竺（インド）に渡り、オランダ船で帰国した人物を題材とした歌舞伎で用いられたようです。アイヌ民族の文様だという理解ではなく、「外国の文様」として意識されていたようです。

日鮮同祖論とアイヌ文様

当時、「日本人単一民族説」も存在しましたが、その理屈では台湾や韓国を領有することを正当化することはできませんでした。その土地に住む人々が、明らかに異民族だからです。そのため、多くの論客たちが唱えた日鮮同祖論が、侵略や異民族支配を肯定できる理屈とし

て広まっていったようです。「かつて日本の領土であった朝鮮半島を大日本帝国が復活させた。また、かつては同一の民族であったがゆえに、韓国の人々を同化させることは比較的容易である」というような考え方です。それらが歴史的事実に基づいていないことは明らかです。

ところで、「韓国併合」絵摺りの中に、なぜアイヌ文様を取り入れられているのでしょうか。よく理解できない部分もありますが、アイヌ民族という明らかな異民族を支配下に加えたように、大韓帝国をも同様に支配下に入れる、同化させるということを暗示しているのかも知れません。アイヌ文様を描くことは、異民族支配を肯定し、それによって「韓国併合」を正当化しようとしているのではないのでしょうか。

当時はアイヌ民族の「人種的所属」が明らかになっておらず、ヨーロッパ系人種説・アジア系人種説・太平洋人種説・孤立人種説の4つの考え方がありましたが、いずれも、「日本人」とは異なる、先住民族だと考えられていたようです。知識人ですら「アイヌは人間ではなく犬だという偏見」をもっていました（坂野 2005、200 頁）。しかし、欧米人の中にはアイヌ民族の生活を尊敬するむきもあったようです（前崎信也氏による）。どれほど意識されていたかは分かりませんが、欧米人が尊敬するアイヌ民族を支配下においている、あるいは、欧米系の民族を支配しているという意識があったのでしょうか。それとも、「野蛮な民族」を支配しているという自負心、「日本型華夷思想」だったのでしょうか。

「韓国併合」を記念した市販絵葉書

「韓国併合」の翌年には、韓国の少女をモチーフにした年賀葉書が現れます（2009年4月古書店より購入）。「東京図按印刷凸版部浪華屋」が発行した市販の絵葉書です。年号は不詳ながら元旦の消印が確認され、「本郷区西片町」（現・東京都文京区）に送られています。年賀状ですから、この絵葉書の発行は遅くとも1910年12月中のことだったと思われます。民族衣裳をまとった少女が羽子



「1911」の影絵入り年賀葉書



年賀葉書の裏面

板や凧という日本の遊具を手にしており、その影が「1911」に見えます。後ろに見える大きな太陽は「初日の出」を示すのですが、「日の丸」=日本という後ろ楯が現れること、あるいは韓国が日本の支配下に入ることを「初日の出」に仮託しているのでしょうか。また、太陽にかかる雲によって、韓半島の地図が浮き上がっており、日本と韓国を掛け合わせていることがわかります。「韓国併合」後、はじめての年を祝うために工夫された絵葉書で、友

禅以上に分かりやすい意味がデザインに仕込まれています。

これらは当時の「国民意識」を反映していると思われます。「韓国併合」を祝うデザインは、絵葉書にせよ、袱紗にせよ、需要が十分に見込めたのでしょう。

拡大した「大日本帝国」の領土

ところで、大日本帝国は1894～95年の日清戦争によって遼東半島・台湾・澎湖島を獲得しました（遼東半島は1895年の三国干渉によって有償返還）。1904～05年の日露戦争後、日韓協約をへて、1910年の韓国併合によって、さらに領土を拡大しました。『韓国併合紀年帖』の表紙は、まさに、その版図を图示しています。1910年銘図案（1）ではレイアウトの関係からか台湾が含まれていませんが、それは韓国に特に焦点を当てているためだと思われます。これらの図は、日本人の意識を「世界に広げる」役割を果たしたでしょうし、国民がそのようなものを求めていたことも示しています。



『韓国併合紀年帖』の表紙

図案・絵摺り研究の意義と弱点

さまざまな図案は、当時の社会情勢を素早く反映したようです。しかし、流行に機敏なデザインを使った製品は次々と変更されて残りにくかったのではないのでしょうか。それに比べると図案は保存されることがあり、世相を知るためには重要な資料になります。ただし、図案は製品そのものではありませんから、そのままの製品が作られたのか、変更が加えられたのか、それだけではわかりません。現在でも、図案を基にしながら、様々な変更が加えられることが多いからです。どの程度普及したのか、何点作られたのかも知ることもできません。その意味で図案から知ることができるのは「構想」の部分に限られるということです。それに対して絵摺りは、その図案から型彫りして変容した姿を知ることができます。型の枚数や関わった職人さんたちの名前まで分かる場合があります。

図案と絵摺りは、異なった意義をもっています。実際に使用された友禅の製品や、実際に使用された絵葉書や刊行物などとも、また異なった意味をもっています。

6. アジア太平洋戦争と伝統工芸

京都は近代だけでも、蛤御門の変や鳥羽・伏見の戦いからアジア太平洋戦争まで、何度も戦禍をくぐり抜けてきました。そのため、京都の産業は伝統を守りながらも決して社会から自由ではいられず、絶えず大きく揺さぶられてきました。現在残る伝統工芸は、その激動の歴史に耐え抜いて生き残った強者たちです。ここでは、京都や周辺の伝統工芸が戦争とどのように係わってきたのか、簡単に紹介しましょう。

(1) 清水焼と戦争

京都市五条坂にある藤平陶芸では、戦時中、軍の命令で「マルロ」と呼ばれる大きな化学陶器を製造していました。これはロケット戦闘機「秋水」の燃料を精製する装置です。本土空襲が激しくなっていた当時、「秋水」はB29を迎撃することを期待されていましたが、開発途中に終戦を迎えました。



清水焼の陶器製手榴弾（五条坂・藤平陶芸）

「マルロ」は当ミュージアムの玄関に展示してありますので是非御覧ください。また、1944年から

1945年にかけて、五条坂の高山耕三や藤平陶芸では陶器製手榴弾を製造していました。

(2) 信楽焼と戦争

のどかな信楽の里も「不要不急」の製品作りでは生産を維持できなくなりました。そのため、軍に積極的に働きかけ、陶器製地雷を製造しました。終戦末期には京都と同じく、陶器製手榴弾も造りました。

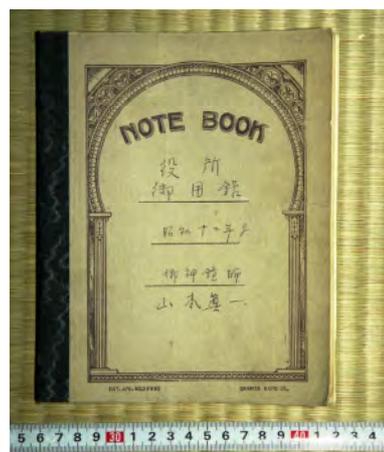


陶器製地雷を手にする女子挺身隊像

これらは終戦直後に割って山に埋められたことから、実戦には使われなかったと説明されることがあります。しかし、実際には硫黄島や沖縄島で使用されました。今でも遺骨収集や工事などで不発弾として信楽焼の陶器製手榴弾や陶器製地雷が出土することがあります。

(3) 和鏡と神社と戦争

京都の鑄造技術は平安時代以来続く高い技術を誇っています。しかし、鏡作りは明治時代以後、西洋からガラス製鏡が導入されたことによって急速に衰退し、御神体・宝物としての鏡作りに特化していきました。山本合金製作所は、戦前、京都で唯一、伝統的な真土型を使用した技術で鏡を製作してきました。戦時中は日本国内や植民地の神社が整備された関係で、御神体や宝物の鏡作りに大変忙しかったといえます。しかし、戦後、その反動で鏡の注文は二〇年近くありませんでした。その大きな危機を乗り切るため、山本合金では戦後、仏具作りに販路を見出しながら、大変な努力を重ねて伝統技法の保持に努力されてきました。この技法が失われてしまえば、日本の神社神道と伝統工芸はとても大きな痛手を被ります。右の写真は戦前の鏡納品先を記録したノートで、満州国建国廟の鏡を納品したことも記録されています。



『役所御用録』

おわりに

長く首都であり続けた京都の歴史は、「引き続く戦争の歴史」でもありました。そのことを忘れて、数々の歴史遺産の華やかな側面、正の側面だけを評価するのは間違っていると思います。戦争の歴史が長く深い京都は、社会変化や戦争に対してもっとも過敏に反応する都市でした。負の歴史を覆い隠すほど正の歴史の評価が高いことは、世界の首都や伝統的な都市とも共通しますが、それだけでは「歴史都市」の評価として一面的に過ぎます。京都の伝統工芸が果たした役割、あるいは歴史的な試練をみたとき、すべてを包み込んで評価することの難しさを感じないわけにはいきません。

「日本に京都があって良かった」という時、私たちは同時に負の遺産をも抱き抱えなければなりません。近代化を遂げ、素晴らしい技術を手に入れた伝統工芸が戦争と無関係でいらなかったことの意味を、「韓国併合」を「おしゃれ」に楽しみ祝ったことを、忘れるわけにはいきません。

最後になりましたが、展示とパンフレット製作にあたって、庵造由香氏、乾淑子氏、岡本隆明氏、金津日出美氏、喜多恵美子氏、小山俊樹氏、鈴木桂子氏、藤井健三氏、前崎信也氏をはじめとする多くの方々のご指導・ご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

(木立雅朗)

[参考・引用文献]

市田ひろみ・藤井健三 2006 『日本の粹と伊達 羽裏 岡重コレクション』アジェット婦人画報社

乾淑子 2007 『図説着物柄にみる戦争』インパクト出版会

乾淑子編 2008 『戦争のある暮らし』水声社

小熊英二 1995 『単一民族神話の起源 日本人の自画像の系譜』新曜社

京友禅史編纂特別委員会編 1992 『京の友禅史』京都友禅協同組合

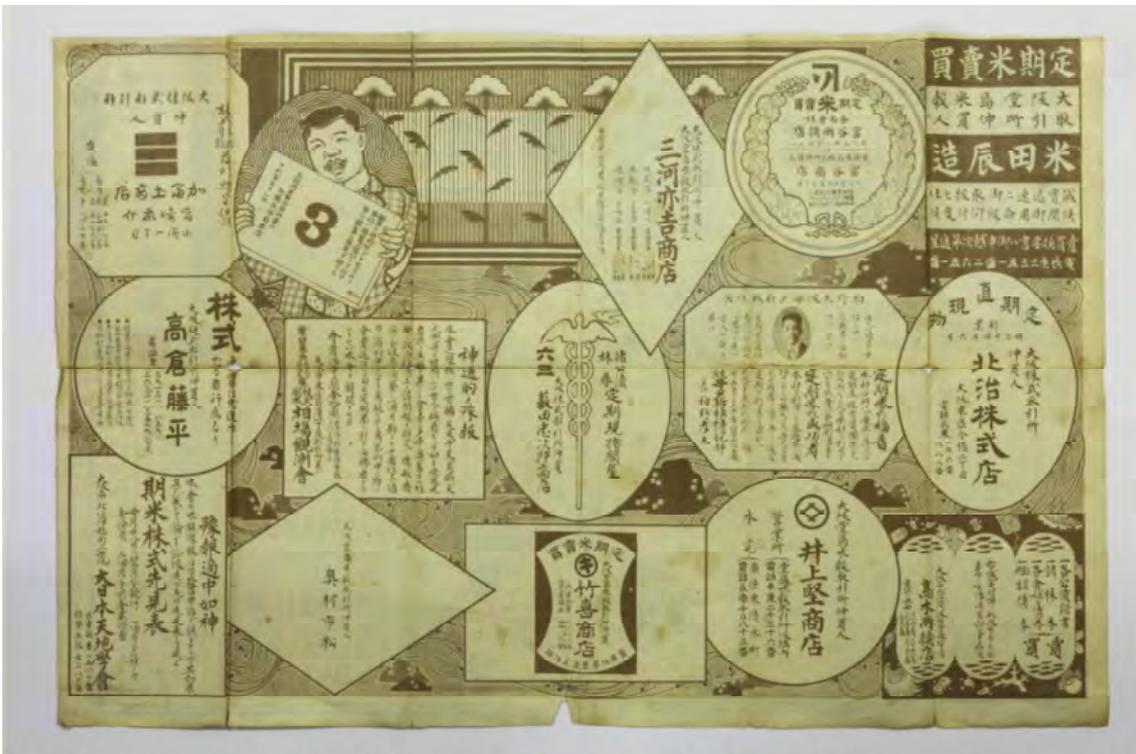
坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者 一八八四 - 一九五二』勁草書房

樋田豊次郎・横溝廣子編 2004 『明治・大正図案集の研究-近代にいかされた江戸のデザイン-』国書刊行会

比沼悟 1972 『近代図案ものがたり その歴史と今後の課題』京都書院



大阪新報第7666号付録『韓国併合記念画報』1910（明治43）年9月28日



『韓国併合記念画報』の裏面（米・株仲買人などの宣伝）



韓国併合を記念した絵摺り(3)の部分

発行日

2009年5月23日

編集

文部科学省グローバルCOEプログラム
「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」(立命館大学)
京都文化研究班

立命館大学文学部 歴史考古学ゼミ(担当:木立雅朗)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部

電話 075 - 466 - 3493 学芸員課程資料展示室

fax 075 - 465 - 8188 文学部事務室気付



友禅染にとり入れられたアイヌ文様(括弧文)